

# 小田原史談

第108号

発行所 小田原史談会  
小田原市南町2-3-21

## 後北条氏秘話

(14)

### 北条氏忠の周辺を洗う物語

中野敬次郎 執筆

(一)小田原城中

二十四人の磔刑

北条左衛門左氏忠の流転の生涯を彼の娘と孫娘(お万の方)の親子の数奇な運命については、すでに相当詳しく前記したところであるが、氏忠の周辺にはなお多くの波瀾の物語を持っている。

氏忠は北条氏康の五男で下野国(栃木県)の名族、佐野城主佐野氏の家督を継いだ人物であるが、この佐野家の跡目をとるに至った次第も非常に複雑な事情がある。これを略記すると、佐野家は田原藤太秀郷の後裔と称する藤原姓の名家で十六代宗綱のとき、小田原北条方の上州館林城主長尾頼長と戦って、天正十三年(一五七五)の正月一日に討死

忠が佐野家を継いで、佐野左衛門佐氏忠と名乗ったのである。

ところが氏忠は佐野を名乗ったのも小田原城に住み、佐野領には唐沢山本城(佐野城)には大貫家、高瀬城には高瀬家、奈良湖城には飯塚家、赤見城には赤見家、椿田城には福地家などの旧佐野家の老臣を配して守らせ、これらの重臣の家から証人(人質)を小田原に出させて、北条家への忠誓の型をとらしめた。

その証人召集について、杉山博先生の書かれた「北条氏忠の下野佐野支配」の文中に、氏忠の発給した証人召集の古文書を示しておられるので、ここでこの文書の文面を拝借して掲載してみよう。

(落合文書、天正十四年八月十日)

証人ノ儀、去正月以来休息候。然共世間物念持分付而、関東中諸証人ヲ集候。就之申断候、其方証人実子成共、又実子幼少ニ付而者

父入道成共申付、来廿日其地ヲ立、廿四日当地(小田原のこと)参着候様ニ可指越、宿以下申付候、不可有劳候、猶岩崎、古橋口上、可有之候、仍如件  
八月十日 氏忠(花印)

証人ノ儀、申懸処、五才ニ成候息并父入道与替々ニ進上可申、由尤肝要候、先ヅ五ニ成候実子、明後十二日ニ可被出ニ落着候、幼少之儀ニ候間、坂下之御大方へ預ケ置可申、心安存可被出、仍自今以後之儀者、昌綱、宗綱御代ニ不相替、抽忠信可被走趨処、可為肝要候、仍如件  
天正十四年丙辰 十一月十日氏忠(花印)

これは佐野氏の重臣落合家に氏忠が給付した文書であるが、これによると、落合家からは当主落合図書の五歳の幼児と隠居の父入道とが交替で人質に出されることになったことが明らかになっている。このようにして佐野領の家老衆、重臣衆の各家から幼年から老年までの妻子、または父兄一人づつを人質にとつたので、「佐野宗綱記」によると、すべてで二十四人であったことを記している。

これら二十四人(多くは子供)の人質達は、小田原から山上五右衛門が受け取りに来て、天正十四年八月二十日に佐野を立って小田原に向い二十四日に到着した。しかし文中に「関東中諸証人ヲ集候」とあるように北条氏は佐野氏のみでなく関東中の所屬の武家から証人を小田原に集めていたことが想像され、小田原にはこれら諸武家の証人達が多数来住していたことがわかる。

「関八州古戦録」によると佐野本家からも、宗綱の末弟毘沙門丸が人質として小田原に送られていたことを記している。これらの人質が小田原で、どんな生活をしていたかは明らかでないが、「落合文書」の文中に、落合家からは幼少ゆえ、「坂下の御大方」に預け置くから安心するように述べている。「大方」とは「タイホウ」「オオカタ」「オカタ」などと読み、一般に城主の奥方のことを指して言うのであるから、佐野宗綱の討死のとき老母、正室、姫君が残ったが、この姫君が氏忠夫人となった故、夫人の母も祖母もともに小田原に来住していたと思われるので、「坂下の御大方」とは氏忠夫人の母を指しているものと思

われる。それ故、証人待遇には北条氏も心をくばったものと察せられるが、人質生活は決して自由、安楽なものではなかったであろう。そして遂にこれらの人々に大悲劇の日が来たのである。天正十八年(一五九〇)小田原合戦のとき、氏忠は佐野城に在城せず小田原城は籠城しており、佐野城は佐野家の家老、旧臣達が守っていた。一方秀吉には宗綱の弟で京都黒谷で僧侶となっていた天徳寺了伯が還俗して俊綱と名乗って加わってあつた。このため佐野に残つた旧臣がみな天徳寺に隠れたという情報が小田原に急報され、小田原城中では氏直の下知で佐野の証人達を殺せようことになり、毘沙門丸を初として二十四人ごとごとくが、小田原城大手口で磔刑に処せられたのである。

一方佐野氏の重臣福地家の「赤松福地家系図について」を見ると、福地家から人質になっていたのは、宗綱とともに須花坂合戦に打死した福地出羽守の三男智則で、最後の時は二十七歳であったと記している。また天正十八年の小田原城での最後は皆自害したのであると書き、佐野人質の人数

は福地智則他三十五名の自害であったと述べ多少の喰い違いがある。

小田原合戦のとき北条(佐野)氏忠は小田原城に籠城しており久野口を守ったが、留守中の佐野の城々では、前主の弟の天徳寺了伯(俊綱)が秀吉軍を嚮道して来攻すると聞いて佐野家の旧臣であるから、皆よろこんで秀吉軍に応じた。しかし本城を守った大貫越中守だけだ。

「今事の切なるに臨みて忽ち心を変ぜんこと、是れ勇士の本意にあらず、某は氏忠の御為に討死するべし」と叫んで、来攻軍の前で櫓の上に登り、自ら首をかき斬って壮烈な自害を遂げた。

なおまた、氏忠が佐野領主であった数年間に氏忠が領内諸家に対して出した多数の給付文書が残されているが、それによると、この間に相当の人数を小田原へ動員するよう諸家に命じているからして、天正十八年の小田原合戦のとき、氏忠配下として小田原城に籠城して戦った佐野出身の人々の数は少なかつたと思われる。しかるに、それらの人々は戦争が終わっても故郷に帰らなかつた。

とにかく、氏忠時代に佐野から小田原に行った人々

は、人質は勿論、兵士も人も足も戦後一人も佐野には帰って来なかつた。佐野の人々はいう。「関八州古戦録」にあるように小田原落城の際に「氏直下知して毘沙門丸ヲ殺シケルコソ無慙ナレ」で人質は全員処刑されたこと前記のごとくだが

他の氏忠に従った戦士達はどうかになったのか。全員討死か自害か。否そうではあるまい。氏忠に属して働いた侍達は、今更情勢の一変した佐野の地に帰って安住することはできなかつたのであろう。

小田原落城の直後、秀吉は北条方の籠城軍は一人残さず小田原退散を命じたのであるが、この時の有様を「小田原記」に

去る程に和議相調い、脇坂中務少輔、片桐市正奉行として七月七日より九日まで数万籠城の者どもを出さずとも北条一家の一族その門葉、国々の大名に至るまでも、運尽きぬれば、勇気を失い、城を出る時は、ただ一命を助からんとばかり思い、親を捨てて子を捨て、取る物も取りあえず我先にと落ち行く体、浅ましかりし次第なり。諸大名の北の方、常は翠帳紅圍の内にあつて、春は花、秋は月を賞で、終に庭の土だにかつて踏み給わざるに、歩行はだ

しにて、乳母だにも連れずして、離れ離れにここかしこに伏し転んで落ち行く有様、紅涙袖を絞りける」

とあるが、小田原籠城の佐野衆も故郷にも帰れず、途方にくれたる結果、遂に富士山麓に集団移民し、帰農して原野の開拓に当たったのではないか。富士市の東北方に下野佐野の子孫を称する家々の多いことその状況については、すでに前項に詳述したところであるから、ここでは説かない

しかし氏忠をめぐる佐野武家の話は、小田原落城悲劇の中の一幕である。

(一)北条氏忠 妻女子女の流転 北条氏忠自身が流転の人であることは、すでに前号で詳記しておいたが、また彼の妻子も流転の運命をたどる。

氏忠の妻として記録の上で知られているのは、佐野城主故佐野宗綱の遺愛の娘で、これは前記したように氏忠が佐野宗綱の遺跡を継ぐために、宗綱の娘と婚姻したのである。然しこの結婚当時のことを考えてみると不自然な点があつて、生年月日は不明であるが、兄で氏康四男の氏規が天文十四年(一五四)の生れであるから、同腹の弟氏忠の誕生は

早くて天文十六年(一五四)と考えられる。もしそうだとすると、佐野氏の家督を継いだのが天正十三年(一五八)であるから、氏忠の年齢はすでにこの時三十八歳に達している。

佐野宗綱の遺児の姫君は「佐野宗綱記」によると、宗綱討死とき(天正十一年)姉五歳と妹三歳であつたと記されているから、天正十三年の祝言とすると、氏忠三十八歳、夫人になつた姫君七歳といふことになるので、この結婚以前に氏忠には必ずやすでに正室のあつたことが察せられる。従つてこれらは家督相続の形式を整えるための名目だけの結婚であり、事実上側室程度の扱いであつたのだから。

そのためか、この女性は天正十八年小田原落城のとき佐野にいて、氏忠が氏直に従つて高野山に行つたので、これと別れ、後に佐野修理大夫信吉の夫人となつている。

佐野修理大夫信吉という人物は富田左近将監知信の二男であるが、小田原合戦後旧佐野家が復活して、天徳寺了伯こと佐野俊綱が、一時十六代の家督を継いだ

が、子がなかつたので富田家から信吉を養子に迎えて佐野家十七代を継がせた。

それは文禄二年(一五九)二月で信吉十八歳であつたから氏忠と別れた宗綱の娘はお十五歳であつて都合よしとて二人を結婚させたのである。別れた前夫の北条氏忠は、小田原、高野、天野大阪、伊豆と流転して、この年、文禄二年六月沈淪のうちに歿している(林際寺過去帳)のは如何にも皮肉なことである。

佐野修理大夫信吉(従五位下、三万九千石、佐野城主)夫人となつたこの女性は、一時極めて幸福に見えたが、これがまた皮肉なことになり慶長十九年(一六四)に至り、信吉が小田原城主の大久保忠隣改易の事件に連座して、所領を没収されて佐野家は継絶する悲劇に会う

信吉自身は信州松本城の小笠原家に預けられ、後召をうけて江戸に出府の道中で中風が昂じて頓死したのである。そして夫人は再び未亡人となり、元和六年(一六二〇)二月二十四日四十二歳で歿した。法名は明窓貞珠大姉という。この人も薄命の女性であつた。

さてここに問題になるのは氏忠の正室であつたであろう女性のことである。この女性の出身は北条氏一族か、或いは関東諸侯中の一家か、とにかくよい身分の家柄であつたと思われ

るが、伝えるところがないので不明である。ところが、この女性が氏忠との間に生んだ一人の娘(性珠院妙月日理)が安房国勝浦城主正木左近大夫頼忠と、その小田原人質時代に結婚して、後に徳川家康の愛妾として有名になつたお万の方(養珠院妙紀日心大姉)を生み、正木頼忠と離別後、お万の方をつれて伊豆に流転し、更に河津城主藤山長門守氏広の夫人となつた記録があるから、この氏忠夫人はお万の方の祖母に当るのである。

お万の方母子の流転の次第は、すでに詳細に述べた(会報第百号第百壹号)ところであるので、再述は避けるが、氏忠夫人の墓が長門国(山口県)萩市にあることは、恐らく何人にも意外に思われることだろう。

(二)北条氏忠夫人 (法号、乗贖院殊深栄法大師)が最後に山口県萩市まで流転したについては、詳しい事情は不明であるが、要するに天正十八年(一五九)小田原落城のとき、氏忠は当主氏直の叔父としてこれを守つて高野山に登つた。そして秀吉は彼の嫡男隆物(年齢不明)を常陸の佐竹義宜に預け

るが、伝えるところがないので不明である。ところが、この女性が氏忠との間に生んだ一人の娘(性珠院妙月日理)が安房国勝浦城主正木左近大夫頼忠と、その小田原人質時代に結婚して、後に徳川家康の愛妾として有名になつたお万の方(養珠院妙紀日心大姉)を生み、正木頼忠と離別後、お万の方をつれて伊豆に流転し、更に河津城主藤山長門守氏広の夫人となつた記録があるから、この氏忠夫人はお万の方の祖母に当るのである。

お万の方母子の流転の次第は、すでに詳細に述べた(会報第百号第百壹号)ところであるので、再述は避けるが、氏忠夫人の墓が長門国(山口県)萩市にあることは、恐らく何人にも意外に思われることだろう。

(三)北条氏忠夫人 長門国萩に眠る 北条氏忠夫人(法号、乗贖院殊深栄法大師)が最後に山口県萩市まで流転したについては、詳しい事情は不明であるが、要するに天正十八年(一五九)小田原落城のとき、氏忠は当主氏直の叔父としてこれを守つて高野山に登つた。そして秀吉は彼の嫡男隆物(年齢不明)を常陸の佐竹義宜に預け

るが、伝えるところがないので不明である。ところが、この女性が氏忠との間に生んだ一人の娘(性珠院妙月日理)が安房国勝浦城主正木左近大夫頼忠と、その小田原人質時代に結婚して、後に徳川家康の愛妾として有名になつたお万の方(養珠院妙紀日心大姉)を生み、正木頼忠と離別後、お万の方をつれて伊豆に流転し、更に河津城主藤山長門守氏広の夫人となつた記録があるから、この氏忠夫人はお万の方の祖母に当るのである。

夫人と姫を安芸の毛利輝元に預けたのである。

この夫人に何人の子供があったか明らかでないが、三人だけは明らかである。

嫡男は監物で、女子は何回も述べるようにお万の方を生んだ性殊院と、末娘が姫路(ひめじ)といった。

夫君は高野山に去り、嫡男は御預けの身となって常陸に行き、長女は孫娘(お万の方)を抱えて伊豆に入

って藤山家に身を寄せた。そして残った幼い娘の姫路を抱えて、傷心深き身を遙かに西国に流れて、毛利輝元

の国である安芸国草津(広島市)に住んだのである。

慶長五年(一六〇〇)九月の関ヶ原合戦で、毛利輝元が西軍の味方をしたので、徳川

家康は江戸幕府創立の翌年慶長九年(一六〇四)毛利氏から安芸を没収して長門に国替

を命じた。毛利輝元は同年十一月十一日萩城に入城したが、このとき北条氏忠夫人と姫君の母とも萩の城下に移り住ませたのである。

夫君氏忠はすでに文禄二年(一五九三)に伊豆で世を去っている

ので、乗讚院は未亡人になつていたが、藩主毛利秀就は寛永二年(一六二五)の氏忠後室に対して百石の知行地を与えていることが萩藩資料として知られる

「関関録」の巻八十、北条権右衛門家所蔵文書の項に同家の「伝書」として記されている。

伝書  
北条後室賜之  
秀就公御印判、御堅紙、御配所付立一百石 大津郡日置村之内 以上  
寛永貳年八月十三日

益田女番頭判  
清水信濃守判  
六道主殿助判

北条後室  
とある。また毛利家は、後に寛永十二年(一六三五)になり家臣の出羽二郎左衛門元盛の次男伊織を北条大方(氏忠未亡人)の養子として北条家を立てさせている。

伊織は初め長次郎といひ、後に伊織と名乗ったのだが北条家を立てるに当たって北条権右衛門就之と称した

としても北条後室に与えられた大津郡日置村百石の知行地をそのまま引きついで、毛利家の家臣となつて明治維新に至った。これが萩藩の北条家の祖である。

寛永十二年に権右衛門が北条家を建設した時に藩主毛利秀就より頂戴した判物文書二点も「関関録」に記されてあつて、その一つに「養母大方知行大津郡日置村之内百石地之事、对其方譲与之通、聞届畢、全令、領知役名等堅固可遂其節者

也、仍一行如件  
寛永貳年正月十九日  
御判  
北条伊織助とのへ」

とあつて、その追記に「私家筋之儀者、太閤秀吉公小田原之北条御退治之時北条内室(北条大方)同息女おひめ地、御当家江御預

け被成候、左候而御当家ニ直様被召置、領地等被下置之候、然処出羽二郎左衛門元盛次男伊織(後に権右衛門)事大方養子に被成、おひめ地と嫁宿被仰付候事」と記して、北条家設立の由来を明らかにしている。

また萩城下に移る以前住んだ安芸国佐伯郡草津村(広島市)にある北条屋敷の跡と伝えるところといわれたが、実は北条大方と娘の姫路母子が毛利輝元から、その城下で屋敷を与えられて住んだところであるらしい

これらの諸点から考えると、毛利家が太閤秀吉から預けられた氏忠夫人母子を約の如くよく保護して好遇した信義の程が知られて心温るものがある。それ故にこの母子の晩年は平和な日々を送つたであらうと思つ

そして、母の北条大方は寛永七年(一六三〇)六月二十六日、娘の姫路の方は、寛永十八年(一六四三)十一月八日に萩の城下で歿したのである

死亡の年令はどちらも明らかでないが、仮りに氏忠夫人が氏忠より十歳年下であつたとすると、歿年は七十二歳になるし、姫路が父氏忠の二十五歳の時の子としても彼女の年は七十歳だから母子とも長寿の人であつた。

四北条氏忠夫人の墓  
私は昨年、小田原市立病院長で、小田原北条氏の後裔で、北条氏研究家という異色の人、北条龍彦先生から、田中助一氏という萩の歴史研究者の書かれた「萩藩における後北条氏」という論文(昭和五十二年二月山口県地方史研究所載)を贈られた。その中に北条氏忠夫人の墓が萩市北吉萩一区の曹洞宗の総源山海潮寺に存在することについて詳細に書いておられる。北条龍彦、田中助一両氏に感謝しつつ、田中氏論文を引用させて頂いて、この問題の話を進める。

萩藩における氏忠夫人母子の墓について書いたものに「入江萩名所図画」(天保、安政年間木梨三岳の著)と、「山口県風土記」(明治三十七年近藤清石の著)の二書があり、前者には、総源山海潮寺の項に「石塔。本門の内に入りノヅラ石にして、碑面に北条氏直室称大方、乗讚院殊

溪榮法大師、寛永七庚午六月廿七日と刻む。  
同一基。左にならぶノヅラ石にして碑面に同息女称姫路、高正院運悟妙慶大師寛永十八辛巳十一月九日とちりばむ」と記し、

後者は萩町の墳墓の項に「北条左衛門大夫氏勝大方墓。(同上海潮寺境内)野面石、北条氏直室称大方乗讚院殊溪榮法大師、寛永七年庚午六月廿七日と銘す大方は豊臣大閣北条氏を征し、氏勝及び其女ヒメヂを合せて毛利輝元郷に預けられる。之を安芸の国草津に置く、氏勝草津に歿し、大方母子関ヶ原陣の時大阪に赴く。秀就の代に至り、母子旧縁を以て萩に来れり。同女ヒメヂ墓。(同上同上)同息女姫路、高正院運悟大姉、寛永十八年辛巳十一月九日と銘す」とある。両文中、氏直、氏勝とあるのは勿論著者の誤りで氏忠と訂正すべきである。そこで、これらの資料に基いて田中氏が海潮寺を調査されて、氏忠夫人の墓が現存するのを発見されたのであるが、氏はその次第を次のように記している。

「これらの記述がどのような資料によつて書かれたのか、明らかでない。私は数年前にこれらの墓を、前住職木村隆法氏と現住職木村審契氏に聞いて見たが、両氏共承知して居られなかつた。それで大体の見当をつけて、墓地内を何度も探して見たが見つからなかつた。

ところが五十年(昭和)のある日、海潮寺であつた知人の葬儀に出席した時、定刻より少し早く到着した見ると、今まで探したことのない所に、ある古墓が偶然目に止まった。高さ八十五種の玄武岩二層の台石の上に赤石紫(福鍋山石)で造つた宝篋印塔の不完全なものが一基置いてあり、その北側の側面に右から「奉為殊溪榮法大師、寛七、六二六、敬」と六行に彫られている。即ちこれは北条の大方の戒名の歿年月日であり、この墓石は古さや書体などから見て、当時のものに間違いのないものである。ヒメヂの墓は恐らく伊勢家が一基だけ残して整理せられた時に、廃棄せられたものと思われる」とある。

誠に貴重な発見記事で、北条氏忠正室の墓が昔のままに、彼女の最後の地である萩市の海潮寺に現存していたのである。

因に萩藩の北条家は九代華(さかえ)のとき明治維新にあり、姓を北条氏から伊勢氏に改めて今に至つてい

るが、同家の墓地整理のと  
き氏忠の娘ヒメメの墓石が  
失われてしまったことは惜  
しまれる。

氏忠夫人の墓は、総高一  
二四の宝篋印塔一基で萩  
城下下魚棚町(萩市北古萩  
一区)総源山海潮寺にある  
最後に、伊豆河津町林際  
寺の過去帳にも、氏忠夫人  
と息女姫路との法名が記さ  
れてあって、萩市海潮寺の  
ものと一致するが、この林  
際寺過去帳は天保九年(一  
八三八)に住職嶺翁淳和尚

の記録したものであるから  
その頃、林際寺と海潮寺の  
間に何等かの交流があつて  
海潮寺のものを転写したも  
のであろう。私は前号で氏  
忠の死歿の年月日を明らか  
でないと言つたが、同過去  
帳には「大関院殿大嶺宗番  
大居士  
文禄二癸巳年四月廿八日  
北条左衛門之佐氏忠公、  
大関齊当山之大檀那也」  
と記しているから、一先  
づこれを探ることにしよう  
香川政治 載録

### 五十七年度

## 定期総会の報告

香川政治

陽春の四月十一日(日曜  
日)午後一時より郷土文化  
館に於て昭和五十七年度定  
期総会を行う。閉会後引続  
き小田原市文化財保護委員  
で箱根物産専務理事連合会  
長の露木保先生の「歴史と  
技術」と題し四時まで貴重  
な話を拝聴、出席者一同感  
銘をうけた。

総会は平岡幸雄氏議長の  
もとに五十六年度事業報告  
並に決算報告、五十七年度  
事業計画、予算(案)の承認  
役員改選(別掲)を行う。  
事業報告

。理事会毎月一回第二土曜  
。会報年四回(頁数八枚)  
。会報編集編五(一三三号)  
を五月十八日発行  
。講演会(三回)  
四月十二日横浜市市史編  
纂委員石井次郎先生の「  
小田原と相模の俳壇」と題  
して  
八月一日静岡大学助教授  
小和田哲夫先生の「小田原  
出現以前の北条早雲」と題  
して  
十二月五日前小田原市立  
病院院長北条龍彦先生の「豊  
臣秀吉の小田原北条氏への

宣布状について」と題し。  
◎史跡めぐり(六回)  
。四月十九、二十日 一泊  
二日信州方面(上田、小諸  
川中島、松代、別所温泉周  
辺の史跡仏閣めぐり  
収入九六〇、〇〇〇円  
支出九〇四、二七〇円  
差引 五五、七三〇円  
。六月二十一日 三多摩方  
面(日野、府中、国分寺、  
調布の各市)史跡めぐり  
収入一八五、五〇〇円  
支出一八三、四〇〇円  
差引 二、一〇〇円  
。八月三十日 甲州(武田  
氏滅亡の遺跡探訪)  
収入一九六、〇〇〇円  
支出一九六、五〇〇円  
差引 五〇〇円  
。十月四、五日 一泊二日

小田原史談会65年度収支決算書及び57年度予算  
昭和56年度決算 昭和57年度予算

(収入の部)		(収入の部)	
繰越金	334.098円	繰越金	403.689円
会費	988.000	会費	1.125.000
(494×2.000)		(450×2.500)	
市から補助	24.000	市から補助	24.000
預金利息	10.33	預金利息	5.000
雑収入	15.000	雑収入	5.000
	※170.500		
計	1.541.921	計	1.562.689
(支出の部)		(支出の部)	
通信費	323.340	通信費	350.000
会報印刷代	264.000	会報印刷代	300.000
特別原稿料	0	特別原稿料	50.000
講師謝礼	60.000	講師謝礼	80.000
(車代)	14.000	(車代含む)	
交際費	26.500	交際費	30.000
事務用品費	12.012	事務用品費	30.000
事務手当	300.000	編集手当	40.000
期末(編集)	30.000	事務手当	360.000
特別手当(事務)	40.000	会議費	70.000
会議費	60.350	特別事業費	50.000
特別事業費	0	雑費	50.000
雑費	8.000		
計	1.138.232	予備費	152.689
残金	403.689円	計	1.562.689円

にて岡崎、吉良方面史跡めぐり  
収入五六五、〇〇〇円  
支出五七〇、八〇〇円  
差引 五、八〇〇円  
。五十七年一月二十四日新  
。五十七年三月二十三日藤

春初詣で(亀戸天神、柴又  
帝釈天)  
収入一四〇、〇〇〇円  
支出二〇、一〇〇円  
差引 一九、九〇〇円  
。五十七年三月二十三日藤

## 三多摩史跡めぐり

### 古代武蔵野文化探訪の集い

香川政治

連日降りず降らずの空  
模様が続いている今日この  
頃梅雨期特有の天候の下、  
我が小田原史談会は去る六  
月二十一日(日)参加人員  
五五名中野会長の家内で大  
型バス一台小田原駅前八小

沢、大船周辺の史跡めぐり  
収入三〇七、八〇〇円  
支出三〇五、九二〇円  
差引 一、八八〇円  
五十六年度(計)  
収入二、五六一、二六〇円  
支出二、三一〇、九九〇円  
残高 二五〇、二七〇円  
昨年度繰越金  
二〇三、三七〇円  
合計 二五〇、二七〇円  
昭和五十七年度 新役員  
会長 中野敬次郎  
副会長 香川政治  
杉崎 正田  
鈴木 平八  
平岡 幸雄  
曾我 保夫  
相沢 栄一  
曾我 保夫  
事務局長 相沢 栄一  
曾我 保夫  
計 曾我 保夫  
沖山 敏子  
監査 宮田 千春  
岩田 栄

分到着参拝後中野先生の説  
明を拝聴しながら約一時間  
の余裕ある時を各自見学し  
車上の人となり、次の同じ  
日野市内に在る幕末の勇士  
新撰組の副隊長土方歳三の  
生家並に菩提寺石田寺を訪  
れ、歳三の墓に詣で日野市  
を後に府中市大國魂神社に  
向う。神社到着十一時五分  
参拝後境内見学十一時五分  
五分神社を後に調布の深大  
寺に向う。非常に順調で深  
大寺に十二時十五分到着中

食前に参詣、寺の前に在る矢田部茶屋にて深大寺名物そばに一同舌つづみを打ち中食後午後二時三十分まで約一時間三十分自由行動を採り散々伍々深大寺裏にある東京都立神代植物公園や境内を参観午後二時三十分出発最後の見学地国分寺市国分寺跡に向う。府中街道を市立第四小学校の処を右折(都道一四五号線)約二百疋走った処で車を降り、(道幅狭いため)徒歩約十分程度にて旧跡地に到着時刻は午後三時丁度、国分寺跡金堂が建立された地であった。地点にて中野先生の国分寺に就いて種々説明あり一同当時、壮大な建造物が建立されておったこと等を追想それ〴〵の感を抱かれておられたことだろうか?

約一時間ほど周辺を見学午後四時帰路に就く。調布インターより中央高速道を東京に出て東名高速道にて帰る予定であったが新宿方面渋滞の標示が出ていたので急遽予定を変更、往路のコースを厚木に出てそれより東名高速道を大井松田インターに出、二五五号線を小田原市内に入り小田原駅前午後六時三十分着解散心配された天候にも恵まれユトリあるコースで意義ある楽しい史跡めぐりではなかったかと思う?。

以下資料をもとに記して見よう。

◎高幡不動尊(日野市)

高幡不動尊に東京都日野市高幡に在り別格本山高幡山金剛寺に「不動明王」並びに「こんがら」「せいたか」の二童子を安置する御堂で古来、高幡不動尊と通称されている。此の堂の由緒は今を去る一千百余年、人皇第五十六件清和天皇の勅願を奉じて、慈覚大師が当地を関東鎮護の霊場と定め、山上を卜して一字の堂を建て之に不動明王の尊像を安置したのに始まると云われ、後、数百年を経て、偶々、建武二年(三三〇)八月四日の夜、大暴風雨のために堂宇が顛倒破壊したので時の住僧儀渡上人の発願によつて、平地に再建したので現在の不動堂で康永元年(三二)六月二十八日の竣工である。

南北朝期の建設として、関東地区に稀に見る古文化財建築と云われ、再建以来六百有余年の間、庶民信仰の真言道場として江湖に親しまれて来たが、昭和二十一年、文部省は国宝に指定し、更に昭和二十五年文化財保護法施行に伴い国庫補助による復原修理の実施を決定して、昭和三十一年七月、工を起し、満二ヶ年六ヶ月の日子を費し、昭和三十

三年十二月末日、根本解体復原の修理を完成したのである。

◎不動堂、仁王門と重要文化財、南北朝時代の建築

不動堂は平屋建て、屋根は入母屋造り銅板葺きであるが、明治十九年(一八八六)まで茅葺きであった。

◎五部権現社殿

東京都重宝建造物、江戸時代初期の建築、木製五部権現神儀(重要美術品)を祀つてある。

◎不動明王

高幡不動古来関東三大不動の一つと云われ、元木の不動尊と呼ばれる大作(鎌倉時代の作)座像高さ二・八八疋、国重要文化財

◎鐘樓堂(江戸前期)、大日堂、大師堂、上杉憲頭

の松、芭蕉句碑(名月にふもとの霧や田のくもり)、新撰組の近藤勇、土方歳三両雄の碑、お鼻井戸等がある。

◎五重塔

満五年の歳月をかけて竣工した五重塔は、塔高三九・八疋総高四五疋、和様三手先出組、青銅瓦葺、平安初期の様式を模した美しい塔で総工費十五億円とか。

◎大日如来像

(金剛界)(藤原時代)別格大本山、高幡山明王

院金剛寺の本尊で行基菩薩の作と伝えられている。永い間秘仏であったが、昭和四十一年に公開された。平安朝の様式を伝えている秀作、木心乾漆、像高八四〇

◎不動明王像

関東三大不動の一つで、元木不動といわれる大作(鎌倉時代作)火焰刻文重要文化財、尊容が極めて雄偉で、古来火防の不動尊又は汗かき不動尊として信仰された。

◎両童子像

【康永元年(三二)朗意修復】 衿襦羅、制叱迦の両童子はともに像高二疋で、特異な風貌をした秀作で弘法大師化身の作の伝説がある。

◎旗かけの松

源頼義が前九年の役で奥州征討を行なう途中、不動尊に戦勝を祈願した時、軍旗を立てかけた松と伝えられている。

◎土方歳三の家と石田寺

土方歳三義豊の略歴を生家の資料により記してみよう。

法号、歳進院殿誠山義豊

大居士 天保六年(二二)武州石田村に生まれ、母の胎内にありて母を失う。実兄の妻に養育される。幼にして武を好み庭園に矢竹を植えて言う

「我壯年武人となって名を天下に上げん」とこの矢竹は現在も繁殖している。

十一歳にして江戸伊藤松坂屋に丁稚奉行に出されたが、本人好まずして夜を徹して甲州街道を逃げ帰る。

長ずるに及び剣を好み、天然理心流三代の主近藤周助邦武の門に入り、始めて近藤勇と相知り以後信義をもつて交わること兄弟よりも深かった。

文久三年(二二)二月四日

徳川幕府は天皇の御在所、京都警備の浪士を募集する近藤、土方はこれに参加し小石川伝通院に会合する。清川八郎隊長となり四月八日京都に上り新徴組を組織する。その後近藤、土方等は隊長清川と意見合わず、清川等江戸に引上げ後は京都に止まり新撰組を結成する。会津公松平守護職の下に京阪の治安維持に当る。動乱の裡に起居すること約五年、形勢利なくして江戸に下る。甲州勝沼の戦争に破れ下総流山に陣したが、ここに近藤捕れの身とな

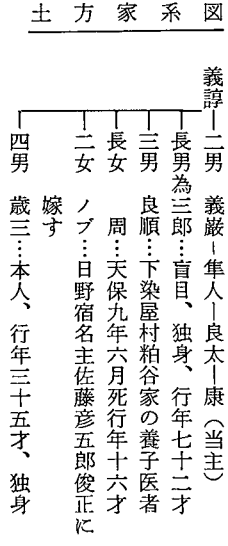
り、板橋庚申塚において斬首される。

その後土方は宇都宮、会津、仙台に転戦、何れも利なくして遂に榎本和泉守武揚と謀り、函館五稜郭に入城する。

エゾ地(北海道)の開拓を断行し、併せて北辺の守りを固めんと屯田兵制度をその筋に敷願すること数度入れなれずして却つて薩長軍の反攻急激となる。遂に明治二年(二二)五月十一日松前表街道一本木関門に於て馬上諸兵を指揮中に戦死時に三十五才、近藤の死後一年であった。

◎大國魂神社

武蔵総社大國魂神社は東京都府中市宮町に在り、大國魂の大神を武蔵の国の国魂として祀つた社である。この大神は、出雲の大國主神と同神で、往古武蔵國を開発し人民に衣食住の道を教えられ、又医療法や禁厭の術も授けられた方で、俗に福神(大國神)又は縁結びの神として著名な方であらせらる。



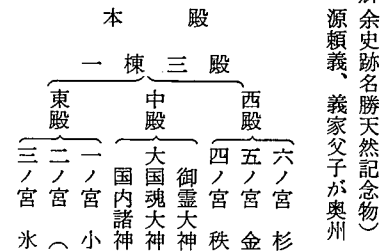
当社の創立は、景行天皇四十一年(二二)約一八六十年前五月五日で、当時は武蔵国造が代々神社に奉仕したが、大化の改新によって武蔵国府を此の地に置かれたので、国司が国造に代って奉仕するようになり、管内神社の祭典を行う便宜上武蔵の国中の神社を一ヶ所に集めて配祀(はいし)・主神にそえて、同社の中に他の神をまつること)された。是が武蔵総社といわれる起源である。なお左右の相殿に、国内著名の神社六所を合祀したので六所明神ともいう。

鎌倉幕府並びに北条、足利両氏も篤く崇敬したが、徳川家康が江戸に幕府を開くと共に殊に崇敬の誠を尽くし、神領地五百石を寄附せられた。明治維新に準勅祭社となり、同七年県社に、同十八年に官幣小社に列せられた。

当社は昔より崇敬者が非常に多く、武蔵国は勿論関東一帯にわたり数十万に及び、毎年五月五日の例大祭には、夜間八基の神輿が古式の行列を整え、闇夜に御旅所へ渡御するので俗に府中の「闇夜祭」といわれ非常な賑を極める。併し現在では御輿渡御は夕刻より行なわれている。

◎祭神及び神座の順序

- ◎社殿及び建築物  
本殿：流造銅板葺、総朱漆塗二十六坪五合、東京都重要文化財、寛文七年造営、元は三殿三棟であったがこの時より三殿一棟に改められた。
- 拜殿：流造切妻千鳥破風銅板葺素木造五十坪  
明治十八年改築され昭和五十三年改修された。
- 平和記念参集殿 新館、附属館を含め四九二坪  
講和条約を記念して、氏子崇敬者の寄附により昭和三十四年落成した。
- 廻廊(八十六坪) 明治維新百年を記念して作られた。
- 宝物殿 校倉造鉄筋コンクリート二階建、百二十一坪、昭和四十九年新築された。
- ◎馬場大門櫓並木(五二〇坪) 余史跡名勝天然記念物) 源頼義、義家父子が奥州



征伐の途中、当社に戦勝祈願をし、戦勝を得て凱旋の時、報賽(御礼詣り)のため榊千株を奉植せられた。その後徳川家康が関ヶ原、大阪の両役に際して、当社に戦勝を祈願し且つ当社の馬市より、この両役に於ける軍馬を多く選出したので両役の終了後、報賽のため又榊を植えて、この馬場を寄進されたという。

◎深大寺  
深大寺の歴史  
深大寺は東京都調布市深大寺町に在る。「浮岳山昌楽院深大寺」といって天平五年(七三三)満功上人によって創建されたという。当時は法相宗であったが創建後百年清和天皇の貞観年中に、時の武蔵国司蔵宗の乱があり、その降伏を祈念するため、朝廷の命をうけ天台の高僧惠亮和尚が東国に下り深大寺をその道場に定め、逆賊降伏の修法を行った。乱治まったのち、その功により、近隣七ヶ村

を寺の領地とし、深大寺を惠亮和尚に賜わった。そのときより天台宗と改まると正暦二年(九九九)には天台座主元三慈恵大師が多くの人人を救いたいという大きな願によって作られた自刻像を、大師の高弟慈忍和尚恵心僧都などが、東国を導くために、深大寺に移して祭った。その後源家の尊敬と信仰をうけて、関東第一の密教の道場として、その勢いは大いに振ったが、鎌倉武士との争いから一時は衰亡した。北条氏が政権を採るようになって、その家臣の世田谷を領する世田谷吉良一族の信依を得て、伽藍(寺の建物)も再興され改めて寺の領地も加えられた。天正十八年(一五九〇)に、小田原北条氏が滅びた時世田谷吉良も没落したので深大寺も危機に至ったが、幸に徳川家康の、守護不入寺領安堵(寺の領地を他人が侵さないという約束)の判状を受けて難を脱すること

ができた。  
正保三年(一六四〇)慶応元年(一八六〇)と二度の火災のためおもな建物は近世のものが多い。經典、仏像、文書なども、その殆んどを焼失したが国宝釈尊像は深大寺の古さをしめしている。

深大寺への参道からの遠望は、波のような、段形の丘陵で、平地の田と、丘の雑木林の奥に鬱蒼たる松、杉の巨木の森があり、その内に深大寺の諸堂がある。寺域は清水に恵まれて、何ヶ所もの泉から湧く水はこん／＼としてつきない流となつて、下流の田をうるおしていた。有史前の人々もこの南向きの丘陵と清水の豊かな所を喜んで住居としたのであろう縄文式土器もこのあたりより多く発見されている。

水を求めて集った人々のこの泉への感謝の心は、素朴な自然崇拜となつて、やがて仏教が伝わりともな水神深沙大王の信仰となり縁起にかかれた甘美なロマンスを生んだのであろう。

当時東国に、集団移住した三韓からの帰化人は、彼等の進んだ大陸文化とともに生活の中心としての仏教信仰をここに移植した。当山と帰化人との関係に就いてもいろ／＼と考えられるロマンスの主人公、福満も

掃化人の一人ではなかったらうか。また柏野里という地名も狼の里が誤って伝えられたのではないらうか。埼玉県に高麗郡と云う所があり、当地の南に続く所を狼江市といひ、古くからの山檀徒に高麗といふ姓の一族があることなど、いろ／＼多くの名称が見られる。こんなところから土着の大和民族と、掃化した高麗人の融和統合の象徴として深大寺が建立され、優美な白鳳仏が祭られたと考えると、ます／＼興味深く思われる。

山門を入ると、正面本堂に恵心僧都作の本尊弥陀三尊仏と白鳳仏が安置されている。左は厄除元三大師堂で大師自刻像が安置されている。山門向って左手の樹林の中に深沙大王堂がある(深沙大王は天平勝宝七年(七三五)開基満功上人の作と伝えられている秘仏になっている)。

右は鐘楼で梵鐘は永和二年(七三三)大工山城守宗光作の銘があり、東京都第二の古鐘として重要文化財に指定されている。

山門前の丘は深大寺古城跡である。天文六年(一五三七)上杉朝定の臣難波田彈正が武州松山の山城として、古城を修復したものといわれている。「武蔵演路」に天

ができた。  
正保三年(一六四〇)慶応元年(一八六〇)と二度の火災のためおもな建物は近世のものが多い。經典、仏像、文書なども、その殆んどを焼失したが国宝釈尊像は深大寺の古さをしめしている。

深大寺への参道からの遠望は、波のような、段形の丘陵で、平地の田と、丘の雑木林の奥に鬱蒼たる松、杉の巨木の森があり、その内に深大寺の諸堂がある。寺域は清水に恵まれて、何ヶ所もの泉から湧く水はこん／＼としてつきない流となつて、下流の田をうるおしていた。有史前の人々もこの南向きの丘陵と清水の豊かな所を喜んで住居としたのであろう縄文式土器もこのあたりより多く発見されている。

文六年七月十一日北条氏綱  
深大寺表の合強に打勝つと  
書いてあるがこの時、上杉  
方が敗れ深大寺城も廃亡し  
た。

南に約十町はなれて虎柏  
神社と虎山祇園寺がある  
ともに満功上人の祖父父母  
近長者と虎女を祀ったとい  
われる。地名から思うと、  
昔の深大寺の規模は大きく  
諸堂も諸所にあつたと思わ  
れ、御塔坂、繪堂、堂山、  
仁王塚などの名前があり、  
一時は官寺国分寺とも勢力  
を張り合つたと思われる。  
なお名物として蕎麦を作り  
江戸時代には深大寺そばと  
して將軍家、上野東叡山に  
も献上し、蜀山人をはじめ  
多くの人々に親しまれた。  
境内山林あわせて二万坪、  
裏は都立神代植物公園に接  
している。

◎深大寺仮名縁起

武州多摩郡浮岳山

昌楽院深大寺縁起

深大寺は福満童子の宿願  
にして、天平癸酉五年満功  
上人の開創、人王四十五代  
聖武天皇の御宇に武蔵国多  
摩郡柏江(現在の佐須)に  
一人の勇士あり、この郷の  
長にてその家富めり、常に  
狩猟を好み、多くの生命を  
断ちて、人の制するをも聞  
き入れず、年の長ずるを  
よぶまで真の寄る辺と頼む  
妻もなく是を遠近に求む、

妓に夫婦あり、何れの所よ  
り来たのか判らず、その婦  
人自ら請うて妻になろうと  
云う。悦びて彼女の名を問  
う、我は虎と言つた。容貌  
麗はしく形よりは心である  
と氣に入り互に慣れ親しむ  
或る時婦語りて曰く「禽獸  
の命を惜めるは人よりも猶  
勝れたり、思へば、生々の  
父にやあらん母にやあらす  
子にや孫にや、後に報をう  
けんを知らずして、いかん  
ぞこれを殺し彼を害するや  
人身を得る事、求劫にも成  
かたし、いたづらに三途の  
業を招き給う、しからずば  
悪縁にひかれて我も共に迷  
はん」と悲しみ深く諫めけ  
れば、男、別れん事をなげ  
きて、狩猟を止めんとし、  
是によりていとむつまじく  
年月を送るうちに、美しく  
玉のような女子をもうく、  
父母のいつくしみは浅から  
ず、月日の光りをいただき  
たるごとくにて、早くひと  
とならんことを思ふに、い  
つとなく此子、十二三ばか  
りにもなれり。

びてこそは婚姻をもととの  
ふべけれ、行衛も知らぬ賤  
しき人とあはせんは本意に  
あらずとて、おもう中を引  
きさきて彼の童女を此里の  
池水の中島に家を営みて住  
ましむ、福満池辺に行くも  
舟もなく筏もなし、毎日  
岸に行みてなげきゆるあま  
り、そぞろに思ふは「昔唐  
玄奘三蔵、天竺におもむく  
時、流沙川に至り水深く波  
早き故に渉る事を得ず、諸  
天これをあわれみ給ひける  
にや水神深沙大王(或は真  
蛇ともいふ)忽然と形を現  
し、三蔵をたやすく渡し給  
う求法の志を感じおほしけ  
るによりてなり、其時深沙  
大王、誓つて曰く、「我永  
らく仏法を擁護せん」とそ  
のち天竺に至り悉く伝法  
して唐に帰へり、あまねく  
法をひろめ給うにより、遠  
く日域におよびて三宝を帰  
依することひとへに大王の  
加被力ときく、今我願は異  
なりといえども大王の扶助  
にて此池水を渡し給へ、も  
し渡り得ば、島頭に神を祝  
いて此池の主たらしめ且、  
当邑の鎮守とあふがん」と  
深く祈る。言下に大きな  
龜、水面に浮かべり、童  
子、信心肝に銘し、則、龜  
に乗つていとやすく中島に  
至り童女にあいぬ、父母こ  
の事を聞いて随喜し、神明  
冥助の上はとて、許して賀

とせり、日をかきね月を送  
りて一男子を産めり、誕生  
奇瑞ともおほし、此児五六  
になるより物ごとさとし、  
かしこく人にすかれ、希世  
の器なりと見る人、聞く人  
感ぜずといふことなし。  
此兒おとなしく成行くま  
まに父、告げて曰く、我昔  
願あり、因縁熟する時なり  
汝、我に代りて釈門に入り  
群生を渡し、我願をみて父  
母の恩を報せよ、兎うけか  
ひてやがて出家し、その後  
唐土に渡り南京に於て大乘  
法相の深き旨をさとり本邦  
に帰り当山を開闢しけり、  
是を満功上人といへり。時  
に天平五癸酉年(三三)なり  
人皇四十六代孝謙天皇、天  
平勝宝二庚寅年(三〇)父の  
本誓によりて一字の社を建  
立し、靈神を勧請せんとお  
もふ、この時深沙大王、納  
受ましますにや、異香四方  
に薫じ神楽、空に響きて靈  
瑞あまたり、正月中の七日  
暁天に神靈水中の岩上に頭  
はれ給う、是寅年寅月寅日  
寅時なり、爾來、寅をもつ  
て当寺の吉日とせり。上人  
の父祖の婦をも登羅と云へ  
り。

ならんと思惟有に新羅國よ  
り画像を送れり、是をもつ  
て彫刻せんと思ふに、御作  
木にせん木なし、或る夜、  
虚空に微妙の声ありて玉川  
にて是を求めよといへり。  
上人聞きて感涙袖をうるほ  
し、歡喜踊躍す。つとめて  
玉川にいたれば、あやしき  
一木水にうかべり、見るに  
桑の木三枝なり、感応の不  
可思議なることをよるこび  
これを取つて寺に帰り、一  
刀三礼して同体三軀を彫刻  
せり。勝宝七年(七五)七月  
七日成就して、其二を下野  
國、出羽國兩所に安置し、  
一体を当寺の本尊とする物  
ならん。一度拜み奉るに鏡  
に影のうつるが如く願とし  
て成就せずという事なし、  
かかる靈威なる事とも聞  
召されて四十七代廢帝の御  
宇に勸願所と定められ、か  
けまくもかしこき宸筆を染  
められ浮岳山深大寺といへ  
る額を賜はるることによりて  
聖朝安寧天長地久、鎮護國  
家の丹精を抽る事、絶やす  
ぞありける。

上人の父祖は狩猟を業と  
し邪見放逸なれども、婦の  
諫によりて正道に帰し、福  
満童子は女をしたひて神に  
祈りて大願を發す、是皆逆  
縁より誠の道に入れり。  
抑も仏教に権あり迷悟不  
二、邪正一如なれば万法皇  
たりに落ちぬ、即ち效を靈

なし、されば東方の婆伽梵  
は遠く是を憐み一女と化し  
て正道に引入れ給ひ北方の  
多聞天は童子となりて縁を  
結び、神靈の応用にあづか  
る。是を以て知るべし、仏  
天の衆生を恵み給うこと筆  
にもことばにも及びがたし  
終に父祖の靈神を深沙の側  
にまつり、当寺の守護とな  
し虎柏明神と名づく、婦の  
名を虎といへばなるべし、  
又薬師如来のたたせおはし  
ます所を虎柏山と称し、福  
満童子も毘沙門天の応作な  
れば池水に一島を築いて東  
向に社を建て、又童女を吉  
祥天女と号して西南に一字  
を祝いあがめ奉りぬ。彼が  
水渉せし靈龜も形を変じて  
鳥となりて今に顕然たり、  
其所に弁財天女の社を作り  
龜鳥の天女と申し伝えられ  
る。

五十一代平城帝の御時、  
更にみこと有りて四海  
安全を祈らしめ給う。五十  
六代清和帝の御宇貞観年中  
(六九)武蔵国司藏宗郷  
叛逆の事あり惠亮和尚に仰  
いで乱賊降伏を祈るべきよ  
しなり。和尚此國の国分寺  
にしてあらかじめ勝地を求  
め修法せんとて不動明王の  
利剣をもつて虚空に投じて  
誓つて曰く、此の剣落つる  
所を道場にせんと、遙に飛  
んでこの寺の泉井のあるあ  
たりに落ちぬ、即ち效を靈



場と定めて、五大明王を本尊として数日の間護摩秘法を修練す。行力むなしからず逆徒、悉く降伏せり、主上叡感のあまり、当寺を恵亮に給い近隣七邑を寄附せらる。此の時より深大寺七邑といへり、爾来、和尚の寺に住いて永く天台の宗風となれり。そのうち猶更源家の高運を祈り護国保民の要法を怠ることなし。しかのみならず仏頂流の秘法を伝えて東関東第一の密場となす。これによりて十二の塔、無常道場、別所等ありて顕密の法、伝はりいよいよ盛によいよ尊ばれ、その頃鎌倉の武士、某の子この山の仁王門のほとりに遊びて忽然と見えず、供人驚き僧坊に告ぐ、一山騒動して捜したが終に見当らず、これを鎌倉に知らせる父母悲しみの余り激怒し一族大挙して乱入し仏閣塔中を破却し、住僧、或は誅せられ、或は逃れ去り、時に人ありて、寺の二王、この児を呑み給えりと云へり、げにも二王の唇を見れば其さましるべかりけり、士卒かの二王を取って土に埋むとぞ、今に二王塚として残り。この時までは寺領も若干ありて、神社仏閣も立並びしが一時に廃壊せり。嗚呼仏法の興廃も時あるにや、悲嘆限りなし。其後瀬

田ヶ谷吉良の屋形信依浅からずして、この山の衰へたるをなげき再興あり、当郷を以て供料にあて波平行安の太刀を納めらる、今にこの太刀あり、天正年間中相州北条滅亡の驛に、吉良一族も落行きて、それより当郷、他の領主となりて、寺院も昔にくらぶれば僅かに十分の一残り、又一年、野火にて堂社僧房灰燼となりしは百年余り前なり、それより正保三年(西暦の春火災ありて縁起経疏靈仏靈物に至るまで悉く焼けた。当山、元三大師の尊像は大師の住せられし比叡山、御自らの作と云う。其後慈忍和尚、恵心僧都などという弟子達心一つにして伝へてきた武蔵深大寺は代々の勅願所であった。(深大寺縁起書より)

◎深大寺の白鳳仏  
奈良朝前期、白鳳時代(大化改新六四五)奈良遷都(七一〇年)の中期の作と思われ、関東に二ツかない白鳳仏(釈迦如来像)古仏として有名である。

この尊像は、開創当時、法相宗時代の本尊であったといわれる。仏教文化の渡来期であった飛鳥時代について、あとの天平時代の最盛期に至る過渡期としても白鳳文化は重要視されてお

り、飛鳥期における三韓經由の、北方文化にくらべて白鳳期の唐との直接交渉の結果生れた、南方文化の異質性は仏教文化の代表である仏像彫刻の上にもはつきりと現われている。飛鳥仏の神秘的ながら、ややかたい美しさに対して、白鳳仏は豊満で、清楚な流動美をたたえている。

千二百余年前の古仏の一鉢が、この東国に安置されている事実は分布的にもまことに興味深いものがあり本尊像については記述や仏師の名、製作年代、製作場所などが、一切伝っていないところから、或は開基功上人が唐土から持ち帰った渡来仏とも云われ、また開創にあたって、当時文化の中心地であった奈良、大和地方で製作された仏鉢を移し祀ったものとも云われている。

◎山門(深大寺)  
山門は、武蔵野特有の分厚い草葺きの屋根をもつ山門で深大寺の諸堂中、最古の建物(推定・桃山時代)である。

◎鐘樓  
梵鐘には、南北朝末期永和二年(三三〇)山城守宗光作の銘が刻まれており東京都第二の古鐘として都下に於ける唯一の重要文化財で鐘樓は江戸中期の建築である

◎武蔵国分寺跡  
武蔵国分寺跡は国分寺市西元町一丁目に在り、天平十三年(七四二)三月二十四日聖武天皇は、国分寺建立の詔勅を発せられた。その要旨は、天下諸国をして国分寺(金光明四天王護國之寺)と尼寺(法華滅罪之寺)を置かれ、七重塔一基を作り、金光明最勝王經と妙法蓮華經各一〇部を備えようというものであったこの国分寺の造営は、各国の国司の監督のもとに、国民の総力をあけて実行されたが、その事業は、なか／＼はかどらなかつたらしい。天平十九年(七四七)には、工事の進行を促す詔勅が発布され天平勝宝八年(七五五)五月二日、聖武天皇が崩御するや、孝謙天皇は、諸国に使者を派遣して、造営事業の進捗状況を巡察せしめて、翌年の五月二日の聖武天皇の忌日までに、すべての工事を完了しよう命じている。これによると国分寺の造営は、その詔勅発令の天平十三年より天平勝宝九年まで実に、十六年余の歳月を要している。

新羅郡の文字瓦がないことよって明らかである。武蔵国分寺は、国衙の所在地府中の北二キロの地点に置かれた。武蔵段丘の南のすそ地の湧水に恵まれた景勝の地であった。寺地面積は、八町四方と云われているが、諸国の国分寺の二町四方と比較すると三〜四倍の大きさで諸国の国分寺中最大の規模のものであったと云う。

伽藍配置は、東大寺と似た配置で、その中心は金堂である。金堂の基壇は、間口一五二尺、奥行八五尺、金堂の建物は間口七間一〇九尺、奥行四間五五尺、軒の出は一五尺ほどで礎石の大きさと基礎工事の状態から考えると建物は二重屋根の大堂宇でまさに日本の国分寺中、最大のものである。基礎工事は基壇の下を深さ八尺ぐらゐまで掘り下げここに赤土と黒土とを交互に敷いて突き固め、壇の周囲は、玉石を化粧積みし、外側の雨だれおちの部分は三尺幅で玉石を敷きつめている。

金堂の北一二〇尺の所に講堂があった。講堂は、間口七間一二二尺、奥行四間五六尺であるが基礎工事は金堂と比較すると、ずっと手が抜いてあったという。金堂、講堂の西側に僧坊跡

がある。坊さん達の住宅である。七重塔は金堂の東南一〇〇尺ほどの所にあった。景勝王經と法華經十部づつはこの塔の中におさめられたのであろう。現在残っている礎石は九個、中央に心柱礎がある。この上に三三三四方の七重の塔が建てられた。有名な法隆寺の五重塔の最上層が一八尺四方であるから武蔵国分寺の七重塔がいかに雄大の塔であったか想像することができるであろう。

ところが、この七重塔は承和二年(八三三)落雷のため焼けた。十年後に再建されたが、元弘の内乱のとき新田義貞鎌倉攻めの時焼かれてしまった。そして今日に至るまで、講堂も僧房も金堂も七重塔も、ついに再建されなかったのである。国分尼寺は講堂跡から南方四〇〇尺の地点にあったが今日では宅地化され当時の面影更になし。

史跡の北に今の国分寺の最勝院国分寺がある。

編集部より  
本月号は毎号続いている中野先生の後北条氏秘話と五十七年度定期総会の報告と紙数の関係で前後します。が五十六年度の史跡廻りの報告を致しました。 杉崎